

CGでみる平城京

—平城京のまちなみ紹介—

都城発掘調査部 主任研究員 前川 歩

はじめに

平城京は和銅3年(710)に藤原京から遷都し、延暦3年(784)に長岡京に遷るまでの74年間、わが国の首都として機能した。一辺約5.3kmの正方形をした藤原京とは異なり、東側に張り出し部がある特異な形状をもっていた。京の内部では、貴族や役人、僧尼、庶民たちの様々な活動、生活が営まれた。発掘調査成果や文献史料をもとに作成した平城京全域の復元CGから、平城京のまちなみをみてみたい。

1. 平城京のかたち

京の規模 平城京は東西約4.3km、南北約4.7kmの方形に、東西約1.6km、南北約2.1kmの張り出し部を東側にもつ(図3)。方形の西部を右京、東部を左京、東の張り出し部を外京と呼ぶ。都城においては他に例を見ない特異な形状をもつ。

京の中核機能である平城宮は京の北辺中央に位置し、一辺約1.0kmの方形の東側に東西約250m、南北約750mの張り出し部をもつ。京と同様に特異な形状を有する。

条坊制 都城内部は条坊制と呼ぶ碁盤目状の道により計画されていた。京を南北に走る朱雀門を中心にして、東西方向に条路、南北方向に坊路と呼ぶ条坊道路(大路)が、それぞれ1,500大尺(約532m)間隔で通される。この大路で囲まれた方形の空間を坊と呼び、坊の内部を東西、南北それぞれ4等分するように3本の小路が設置され、坊を16の区画に細分する。この細分された1区画を坪(町)と呼ぶ。

このように規則的に街区がつくられているので、位置(住所)もわかりやすく表示することができる。右京、左京で大きく区分し、坊の位置を条、坊大路の順番で表す。坪の位置は、朱雀大路側の北隅を一坪として、下に下り、2列目以降はつづら折りに十六坪まで番号を付与する(図1)。例えば、長屋王邸であれば、左京三条二坊一・二・七・八坪となる。

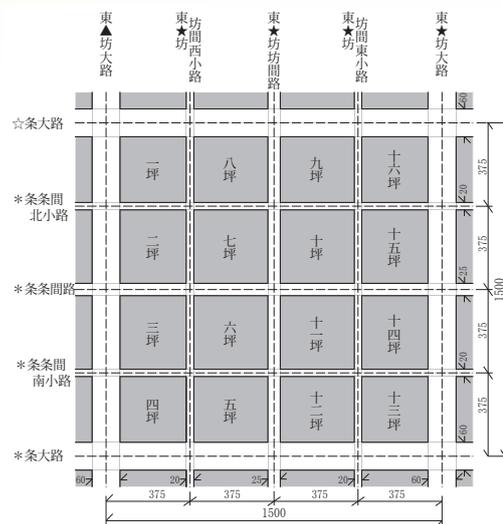


図1 平城京条坊設定模式図(左京、単位はすべて大尺)



朱雀大路アイレベル(南から)



二条大路アイレベル(東から)



小路アイレベル(西から)

図2 道路別イメージ

(朱雀大路:幅員74m、二条大路:幅員37m、小路:幅員7m)

道路の規模 最大幅をもつ道路は、メインストリートの朱雀大路で、側溝心々間（以下すべて同様に計測）で210大尺（約74m）である。藤原京の朱雀大路の約3倍の規模となる。朱雀大路に次ぐ道路は、平城宮の南を東西に通る二条大路で、幅は105大尺（約37m）と朱雀大路の半分で計画されていた。その他の大路の幅は40大尺（約14m）から70大尺（約25m）まで、いくつかのバリエーションをもつ。小路は坊の中央に通る坊間路、条間路が幅25大尺（約9m）、それ以外の大半は20大尺（約7m）もしくは20小尺（約6m）で計画された（図1・2）。

2. 平城京内のまちなみ

1) 寺院

平城京には、藤原京から移ってきたものも含め、大小多くの寺院が建立され、京のまちなみに彩りを与えていた。

伽藍 飛鳥や藤原京では塔が重要視され、金堂とともに回廊で囲まれた空間に配置された。平城京の寺院では、藤原京時代の伽藍配置を踏襲した薬師寺以外では、塔を金堂から離して配置するようになる。多くの寺院は、南を正面とし、東西の大路に南大門を開き、その北方の回廊で囲まれた空間には、南面中央に中門を開き、金堂や講堂が配置された（図4）。

元興寺では、南面に中門、北面に講堂を配し、内部に金堂を置く。興福寺、唐招提寺、法華寺では、南面に中門、北面に金堂を配し、回廊内部に何も置かない。東大寺では、南面・北面に中門を配し、内部に金堂を置く。西大寺は南面に中門を配し、北面に弥勒金堂、内部に薬師金堂を配した特異な伽藍をもつ。回廊の形式は藤原京の寺院では単廊であったが、平城京では多くの寺院で複廊形式が採用された。

堂宇の規模 堂宇の規模は、飛鳥時代と比べ大規模化が進む。法隆寺金堂は、桁行総長46.8尺、梁行総長36尺であるが、薬師寺金堂で桁行総長90尺、梁行総長52.5尺、興福寺中金堂で桁行総長124尺、梁行総長78尺、唐招提寺金堂で桁行総長94尺、梁行総長48尺と、桁行方向に大きく規模が拡大していることがわかる。東大寺金堂（大仏殿）は桁行総長290尺、梁行総長170尺と、破格の大きさを誇る。

2) 邸宅

貴族の邸宅 平城京における最大の宅地は、左京四条二坊に位置する藤原仲麻呂の邸宅（田村第）で、八町におよぶ。後に法華寺となる藤原不比等邸宅は左京二条二坊に四町、長屋王邸も左京三条二坊に四町の邸宅を構える。

長屋王邸の宅地内の様子を見てみよう（図5上）。

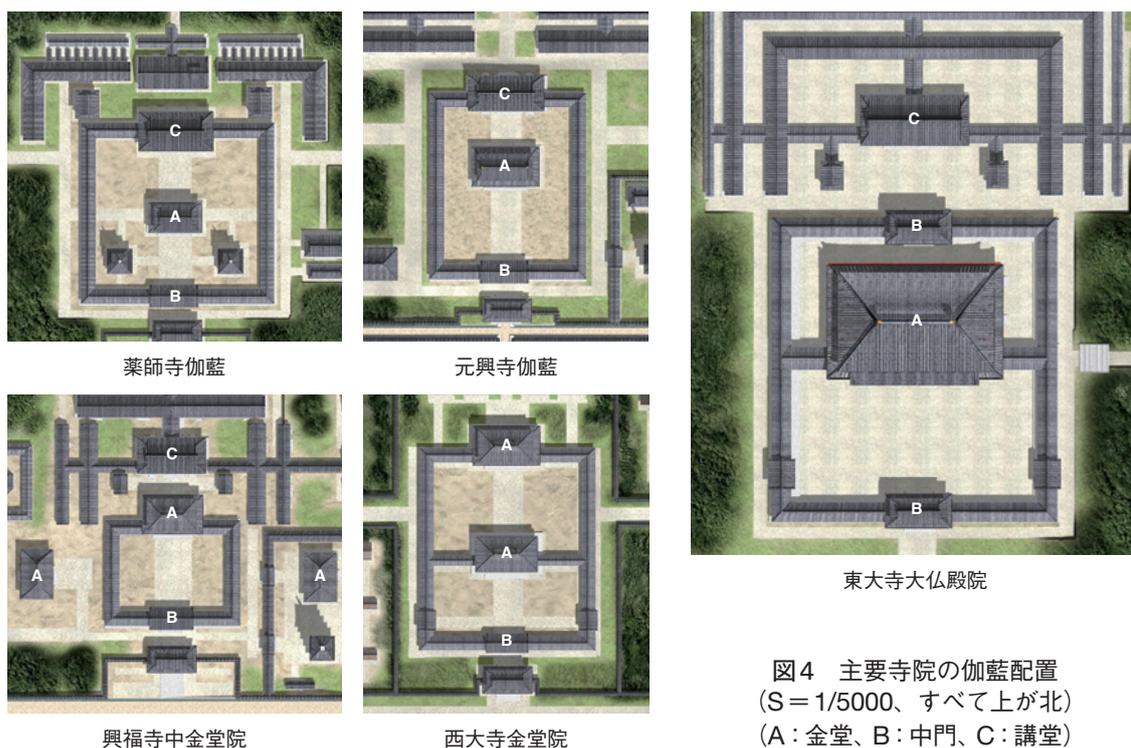


図4 主要寺院の伽藍配置
(S=1/5000、すべて上が北)
(A: 金堂、B: 中門、C: 講堂)

宅地内は掘立柱塀でいくつかのブロックに分けられ、南半部には東西に並ぶ3つの内郭が造られている。このうち、中央の内郭が長屋王が住んでいたと推定される区画で、区画中央には桁行総長80尺、梁行総長50尺の大規模な正殿が配される。宅地内には多くの建物が建てられるも、建物形式は掘立柱建物、檜皮葺もしくは板葺が大半で、礎石建物は稀であった。

このような大規模な宅地は、いずれも貴族の邸宅で、一町以上の規模を持った宅地は平城宮に近い位置に集中する。

庶民の邸宅 八条や九条といった宮から離れた、京の南端では、1/8町以下の宅地が増え、右京八条一坊十三・十四坪では、1/32町の規模の宅地が確認されている。これは、平安京で行われた、1坪を東西に4分割し、南北に8分割して、1/32町区画をつくる四行八門制の萌芽ともみられる。

宅地内には、2～3棟の建物が建てられ、屋根は檜皮葺、板葺、草葺であったと推定される。宅地ごとに井戸が設けられ、空閑地には畑などが充てられていたとみられる(図5下)。

3) 流通・市

東市・西市 平城京内には、左京、右京それぞれに官営の東市、西市が設置された。東市は左京八条三坊五・六・十一・十二坪、西市は右京八条二坊五・六・十一・十二坪に位置していたとみられ、それぞれ4町の規模を有していた。各坪の周囲には築地塀が巡っていたとみられる。東市では、東半の2坪(十一・十二坪)の中央を東堀河が南北に流れる。

運河 平城京内には東西にそれぞれ堀川が南北に通され、運河として利用されていた。いずれも北から南に流れる。西堀川は西一坊大路の西に沿って南北に流れ、現在の秋篠川に比定される。南北をほぼ一直線に走っており、運河として直線状にされたとみら



図5 貴族・庶民の邸宅
上：長屋王邸、下：1/16町と1/32町の宅地

れる。西市への物資運搬を担っていた。東堀川は現在すでに失われているが、発掘調査から左京三坊の中央付近を南北に流れていたとみられる。北で西流していたとみられる旧佐保川に接続していた可能性が高い。河幅は10～12mであったようである。先述したように東市を南北に横断し、東市への物資の運搬を担っていた。

おわりに

以上、CGをもとに平城京のまちなみをみてきた。平城京の様相については、不明な部分が多く、CG作成には想像に依ったところもある。今後の調査成果に期待し、さらに精緻な復元を引き続き進めていきたい。



前川 歩 (まえかわ・あゆみ)

都城発掘調査部遺構研究室 主任研究員

1978年 愛知県生まれ

2003年 大阪市立大学工学部卒業

2005年 大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻 博士前期課程修了

2013年 奈良文化財研究所 研究員に採用

2020年 現職

現在の専門分野は、建築史